

FD ニュースレター

Health Sciences University of Hokkaido



北海道医療大学FD委員会

FD News Letter No. 7

■授業アンケート結果の公開について

FD委員会委員長・心理学部 教授 阿部 和厚

「学生による授業評価」は、現在、ほとんどの大学で実施しています。全学規模の授業評価実施で先駆的
大学といわれる東海大学は、平成5年にこれをはじめました。実は、私の前任校でも平成5年にこれを開始
し、これを多面的に検討を繰り返して、毎年、実施となったのは平成10年からです。私はここに長年かか
わってきました。前任校では、点検評価委員会の活動の一環として行っていました。私が平成14年にこちら
の大学にきたときには、すでに「授業アンケート」としてはFD委員会の活動として開始されていました。
これを改訂した形が、現在のものです。学生による授業評価は、現在、ほとんどの大学で行われ、多くはF
D委員会を中心に実施されています。

「学生による授業評価」、学生から評価を受けるのは耐えられないということの名残は「授業アンケート」
という名称に残っています。「授業改善アンケート」としているところもあります。いずれにせよ「学生によ
る授業評価」はほとんどの大学で行われ、この実施に抵抗している時代ではなくなっています。授業評価に
対して教員からでてくる懐疑的意見については、そのほとんどを東海大学の安岡高志先生が多く取り上げ、
論じています(安岡高志・他「授業を変えれば大学は変わる」、プレジデント社、1999)。安岡高志先生には、
本学のFD委員会でも招き、講演をいただいたことがありますので、ご記憶の先生もおいでと思います。ま
た、私も教員評価法を論じた論文で、授業評価についてふれ、一般的な意見について論じたことがあります
(阿部和厚・他「北海道大学における教育業績評価法」高等教育ジャーナル、1997)。本学で聞いたことが
あるほとんどの意見は、すでにあがっています。「学習のモチベーションの低い学生の評価が入った結果は
妥当性に欠ける」「できない学生が教員を評価できない」「大学の授業は他人から押しつけられるものでは
なく、学生の評価を気にして行うものでない」「学生に迎合するようになってくる」「学生に気に入られる授業
をするのは簡単だ」「教員の能力開発より先に、学生の能力開発が先だ」「その場で理解できなくても、後で
役立つものもある」……。このような意見は、以前のFDニュースの私の記事「授業アンケートは何のため
にするか」でもとりあげました。今、ここではもう論じないことにします。

「授業アンケートは何のためにするか」では、授業アンケート結果の公開について、および個人情報との
関係についても少し論じましたが、今回は、この点に焦点をあてます。

1997年のデータですが、授業評価を行っている大学が全国でほぼ50大学あり、このうち結果の公表をし
ている大学は25校あったとのこと。半分か公表していたこととなります。これからすでに10年たち、
ほとんどの大学で授業評価している現状ではさらに多くの大学が公表していると考えられます。大学は900
ほどありますので、すでに数百の大学が結果の公表をしていると考えられます。

公表の仕方は様々です。

私が直接に接した大学、短期大学でみますと、1)各教員の氏名、顔写真入りで、科目名、各項目および
総計などの評価データ、その授業の説明、改善点、改善しようとする点について各1ページをとり、これに

全体集計を加えて冊子として公表、2) 各教員名、担当科目名、評価データの羅列による表を全体集計とともに印刷公表、さらに同様のものを掲示、3) 教員名を除き、あとは2)と同様の表を全体集計とともに印刷公表(科目名から、教員は特定できる)、4) 大学のホームページに、イントラネットとして、2)と同様のものを掲示などの形態があります。ただし、自由記述の部分は、公開していません。

また、評価の結果を表彰に結びつけている大学もかなりあります。よい教育をしていると判定された教員に教育研究費をサポートし、これを意気に感じてさらに教育改善に結びつけています。こうして教育改善が活性化されている大学もあります(堀井和男「ポイント制による教育総合評価システム」大学評価 2005)。

北海道医療大学でも、授業アンケート結果の公開は、すでに決定されています。現在、この準備を進めています。以下の方針です。

- 1) 学内構成員のみに公開するイントラネットで対応
- 2) 数値は授業の種類や規模などの多様な要素で変動し、総点が単純にランキングを示すものではないので、数値の意味を明記
- 3) 学部により授業形態、教育内容も異なるので、学部別に整理
- 4) 各授業の各設問に対する平均評点と総合評価指数(総合評点)を公表
- 5) 自由意見は非公表
- 6) その授業についての考え方、アピール、自己評価、改善方策などの短い説明を入れて公表

1)から5)までは現在のデータをそのまま使えますが、6)には新たな対応が必要になります。ただし、6)に関しては、各教員の自己点検評価で、教育について「優れた点」「改良すべき点」「改善に向け意欲的に取り組むべき方策・目標」の記載でアピールできるかもしれません。

なお、FD委員会による学生による授業アンケートとは別に、教員評価準備委員会による「教育、研究、社会貢献、管理運営」業績調査票には、「学生による授業評価の結果：実施した回数・平均点」と授業アンケートの点数を書き入れる項目があります。もともと、授業アンケートの数値は、教養科目か専門科目か、講義か演習か、必修か選択か、そしてクラスサイズなどでかなり差がでます。そのため、この数値が単純に授業の質のランキングを示すものではありません。数値のみで横並びの比較はできません。しかし、同様の授業であれば、数値のよい授業はよい授業といえるでしょう。また、ある教員の同じ科目の授業で年度による変動は、授業の質の変動を表しているといえるでしょう。数値は、授業の質の指標といえます。

学生による授業評価は、教員評価に使われるべきでないという声は、今でも聞こえます。これを査定につかうのはとんでもないという声もあります。しかし、授業は誰のものか、大学は誰のものかを考える必要があります。学生が高い授業料を払い、教員はその授業料で給料をもらっている以上、まちがいに授業は学生のためのものであり、大学教師は教育を生業とするプロでなければならない。プロであれば、授業料と引き替えに授業の提供を受ける学生の評価を受け、それによって給料のある部分が査定されるのは当然ではないか。これはけっして教員の人物評価ではない(安岡高志、1999 から内容を引用)。もやは、学生のためにあるということを意識し、これに対応し、改善していくことなしには、大学の発展はない時代となっています。

その大学における教員の業績評価の大きな柱は、教育と研究です。現在は、どうみても研究業績中心です。しかし、研究は、科学研究費などで社会的に厳しく評価されています。こうなると、その大学の教員評価は、教育を重視すべきです。そして、教育評価、授業評価(ここでは、学生による授業評価結果も参考にして)の高い教員が、予算や給与の面でも優遇されるようにならなければ、授業に対する姿勢がいつまでたっても教員中心で学生の視点にたてないのかもしれません。

学生による授業評価の結果は、今すぐに査定に結びつくようにはなっていませんが将来的には実施されることが予想されます。業績調査票では、ウエイトでいうと、百分の1ぐらいでないでしょうか。いずれにせよ、大学の発展には、教育業績は重要な査定の基準となってくることは避けられない時代になっています(阿部和厚「教員評価は教員のその大学への貢献度を測る」大学評価研究、2005)。そうであれば、評価結果は、不公正に利用されたり、教員の不利益にならないためにも、公表は必須のものとなってきます。しかも、教

員全員の評価への参加とその結果の全員公表がフェアです。わが大学が新しい時代の大学として発展していくためには、評価結果も含めた、様々な必要情報がオープンであるという文化のなかで、全員一致による前向きな改善、行動が必要です。

■平成17年度（通算第4回）FD合宿研修を実施

テーマは No Student Left Behind Unfulfilled

平成17年度（通算第4回）の泊り込みFD合宿研修が、平成17年9月23日（金）・24日（土）の2日間にわたり開催され、本学各学部・歯学部附属歯科衛生士専門学校の特任教員28名が参加しました。また、ディレクター、タスクフォース担当教員5名が参加しました。

参加者は、23日朝、札幌あいの里キャンパスと別キャンパスからバスに乗り、車中では自己紹介、簡単なオリエンテーションを実施し、不安と期待を胸に研修会場である「ないえ温泉ホテル北乃湯」に向かいました。会場到着後は、記念写真を撮り、さっそく研修室に直行しました。研修に当たっては、例年どおり廣重学長からご挨拶をいただく予定でしたが、今回は公務のためかなわず、同学長からのメッセージをご披露し研修がスタートしました。

はじめは緊張気味の教員もアイスブレイキングも兼ねたグループの愛称などを考えるうちに和気あいあいとなりました。ちなみに、A班は「早く明日にな

らないかな」、B班は「温泉気分」、C班は「レモンC」、D班は「あき」でした。今年のテーマは、「No Student Left Behind Unfulfilled」で、ワークショップ（WS）は、1日目がWS1「落ちこぼれのない教育」に対する問題は何か、WS2「演習・多肢選択試験問題作成演習」、WS3「演習：MPLの計算」、2日目は、WS4「落ちこぼれのない教育：具体を設計する」、WS5「落ちこぼれのない教育年次・年間スケジュール」、WS6「本学における教育改善・改革の多様な課題」の6つに分け、それぞれタスクフォースによるミニレクチャーや作業内容などの説明があり、数十分から一時間程度のグループ作業を行い、その結果を全体に発表、討論することを繰り返しました。

第1日目の研修は午後7時50分で終了、そして8時からは、“ほろよい懇談会”が開催され、学部を超えて親睦がはかられました。この懇談会では、本学の教育をアピールするキャッチコピーを募集しました。いろいろなキャッチコピーが出されました

が、お酒も入ったせいでしょうか、思わぬもの(?)も出て終始笑いの絶えない和やかな懇談会となりました。

なお、今回のニューズレターでは、参加者の感想や研修で発表された薬学部と歯学部の国家試験対策をとりあげました。



(研修会場到着後、さっそく全員で記念撮影。余裕の笑顔でしたが・・・)

学生に対する「愛情」が垣間見えたテーマ

心理科学部 講師 中山 剛志 (Aグループ)

大学教育に携わって実質2年目の若輩者です。3回目のFD参加でしたが、今回はこれまでのものとは内容が異なり、他学部の国試対策や多肢選択問題作成・合格基準判定のhow to、など、個人的には興味深いものでありました(学生には「how toを求めるな」といっておきながら…)。恥ずかしながら、私はこうした取り組みをずっと怠っていました。科学に従事する者の末端として、「明確な教育」とでも言いましょうか、こうしたことは自ずと考えてできなかったらいけないのかもしれない。

グループ討議では各学部・学科間で異なる要素が多くあり、これを整理する必要性が感じられました。また、メインテーマに掲げられた文は(おそらく狭義には)国家試験合格100%という意味のようですが、広義には各教員でいろいろと思うところがある

ようでした。しかし、そこに学生さんに対する「愛情」が垣間見えたりしたのも事実でした。



職場の環境づくりも大切

歯学部 講師 広瀬 弥奈 (Bグループ)

ワークショップ形式のFD研修会は、他学部の先生が日頃何をしているのか、臨床・教育・研究についてどのように考えているのかを知ることができ、交流を深める大変良い機会となった。また、本大学の教育理念、使命について再確認できたことは、有意義であった。今回のテーマに出てきた、「落ちこぼれ」の意味が、留年すること、何年も卒業できないこと、国家試験に合格できないこと、と具体的な意見の他に、本人のやる気が全く無くなった時が真の落ちこぼれであり、他に興味を見つけて方向転換することは決して落ちこぼれではないという意見も認められた。教育に携わる教員は、それぞれが学生に興味をもち、愛情を持って接することが大切で、これらの意味を踏まえたキャッチフレーズとして、「顔の見える教育」、「君を応援する!!!」「きつとなれる! 応援する!」等が出ていた。最後に、医療に携わる専門職能人を育成するということは、実践教育が不可欠であり、良い教育を行うためには、教員の技能の維持向上も大切であるという意見で締めくくられた。

学生がいてこそ成り立つ大学ではあるが、教員のモチベーションを高められるような職場の雰囲気づくり、教員がヘトヘトにならずに仕事のし易い職場の環境づくりも大切であると思った。



学生の自由なる意志を尊重し、その自立を応援する教育

看護福祉学部 教授 倉橋 昌司 (Cグループ)

今回のFD合宿研修では「落ちこぼれのない教育」について考えた。グループ内でも最後まで議論になったのが「落ちこぼれ」とはどのような状態を言うのか、という基本的な部分であった。学則には休学、転学、退学、卒業が規定されており、学部履修規程には再試験、進級・仮進級、留年などが規定されている。学生は自ら学び、自らの道を選択する。大学と教員は学生の自由なる意志を尊重し、その自立支援をする。生涯学習においては「落ちこぼれ」という概念は存在しないということである。大学でも、規則、規程を見る限りにおいては「落ちこぼれ」は「ない」ことになっている。学生の自由なる意志を尊重し、その自立を応援するような教育こそ「落ちこぼれのない教育」に思えた。今回の研修は、大学

では当然なされているべき「落ちこぼれのない教育」について考える機会になりました。



学生を広い観点から評価することの重要性を認識

心理学部 講師 齊藤 恵一 (Dグループ)

この研修のはじめに、私は何を落ちこぼれと見なすのかという問題にぶち当たった。しかし、研修が進むにつれ、このような問いは次第に意識されなくなっていった。他の多くの参加者もそうであったろう。

今回、ワークショップでは落ちこぼれに関する様々な問題が取り上げられた。また、五者択一形式の試験と合否判定の定め方についてのタスクフォースによる解説も行われた。私にとって、これは落ちこぼれの判断基準の一つの形式を意識させるものであった。

さて、最初の問いに戻るが、感想を書いている今になって次のことがわかった気がする。それは、落ちこぼれの判断基準は時と場合によって変わり得るものであり、また一つの基準で線を引けるものではない、ということである。落ちこぼれの判定に際しては、学生の様々な面を総合的に評価しなければな

らないときもあるし、ある一つの試験も用いた手続きによって判断しなければならないときもある。

このように考えると、今回のFD研修は、学生を広い観点から評価することの重要性を認識させるものであったと言える



強制的お膳立て

薬学部 教授 樋口 孝城 (タスクフォース)

昨年度に続きタスクフォースを務めさせていただきました。志願したわけではありません。今回はFD委員会委員がタスクフォースを務めるという阿部委員長の方針によるものです。趣味としての「バードウォッチング」ではなく、一応は仕事としているつもり「野鳥調査」に休日をあてている身としては少々辛いところがありましたが、断るだけの勇気を持ち合わせてはいませんでした。

タスクフォースも含め、FD合宿研修に参加を指名された教員の多くの本音は、「せっかくの休日なのに指名されてしまって、ムッ」かもしれません。でも現実に参加を断るところまではいかないでしょう。もしそんな蛮勇を奮う人がいたならば、その人は、大学を辞するという勇気をも合わせ持つべきです。わけは簡単です。教員のほとんどは、一人ひとりの学生に付加価値をつけて社会に送り出すための教育を最大の責務としており、その責務を果たす、あるいは果たすための努力をするという暗黙の契約のもとで報酬(出所の大部分はもちろん授業料です)を得ているからです。FD合宿研修が教員の教育資質向上のための取り組みの一つとして位置づけられているからには、もうこれはやるしかないので。

泊りがけでまでする必要はないという声も聞かれます。でも個人的には泊りがけにこそ意味があると感じています。いつもとは違った場所的環境、人的環境で、いつもとは違った脳の部分を無理やり働か

せるのは意味あることです。

FD合宿研修参加の成果は一人ひとりによって違うと思います。positiveな成果ばかりではなく、negativeな成果もあるかもしれません。あるいはまた、成果無しという人もいるかもしれません。でもそれはそれで構いません。それをもとに全体として、また個人として次を考えていけばいいからです。次を考え、可能な限り実行に移すことがDevelopmentであり、我々に与えられた責務の遂行につながっていくものと考えます。

全学的教育向上のためのFD合宿研修という強制的お膳立ては、おそらく次年度以降も続けられるでしょう。教育する側(教員)にも、される側(学生)にも、それぞれの資質向上のためには、ある程度の強制が必要かと思います。強制の結果が「反発」ではなく「発展」になることを願っています。



■ 国家試験対策

FD合宿研修で発表された薬学部と歯学部の国家試験対策をご紹介します。

<薬学部の国家試験対策について>

薬学部 助教授 吉村 昭毅

組織

教務部長を委員長とする国試対策委員会が中心的役割を担っている。薬剤師国家試験は「基礎薬学」、「衛生薬学」、「医療薬学(薬理学、薬剤学)」、「薬事関係法規及び薬事関係制度」の4分野に分けられ出題されることから、各分野から1~3名の教員を選任し、委員会を構成する。本委員会の主な作業は、1)前年度の結果(国試対策や国家試験の成績など)の反省と当該学生の状況を踏まえて、当該年度の対策の指針を作成する。2)出題基準に基づく講義・試験問題担当教員の割り振りや講義や試験問題作成のための指針の作成。3)4年後期より始まる薬学総合講義、薬学演習講義のスケジュール、シラバスの作成。4)薬学演習試験問題の取りまとめと問題チェック、試験後の誤答率の調査と問題内容の吟味、などである。なお、本委員会のメンバーは卒業試験委員会の委員も兼ねている。

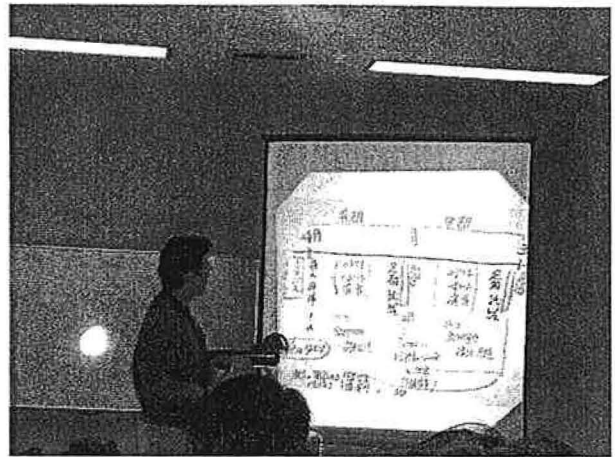
実施要領（対策）

3年半にわたって学んできた各教科の知識を整理、統合し、総合的に判断する能力や応用力を養うために開講される各種講義（総合講義、演習講義）及び演習試験を通して実施される。

1) 実施時期：4年後期（9月～12月）—この期間を4期に分け講義及び試験を行う（下図参照）。なお、4年前期は主として基礎学力の養成を目的に、試験及び補講等が通常の講義と平行して行われる。

2) 実施内容：薬学総合講義（61講）、薬学演習講義Ⅰ（67講）及びⅡ（39講）を各分野で国家試験問題の出題数に基づき適当に割り振り、開講する。各担当教員は国家試験の出題基準に沿って、国家試験対策用テキスト及び独自に作成したプリント類を用いて講義を行う。

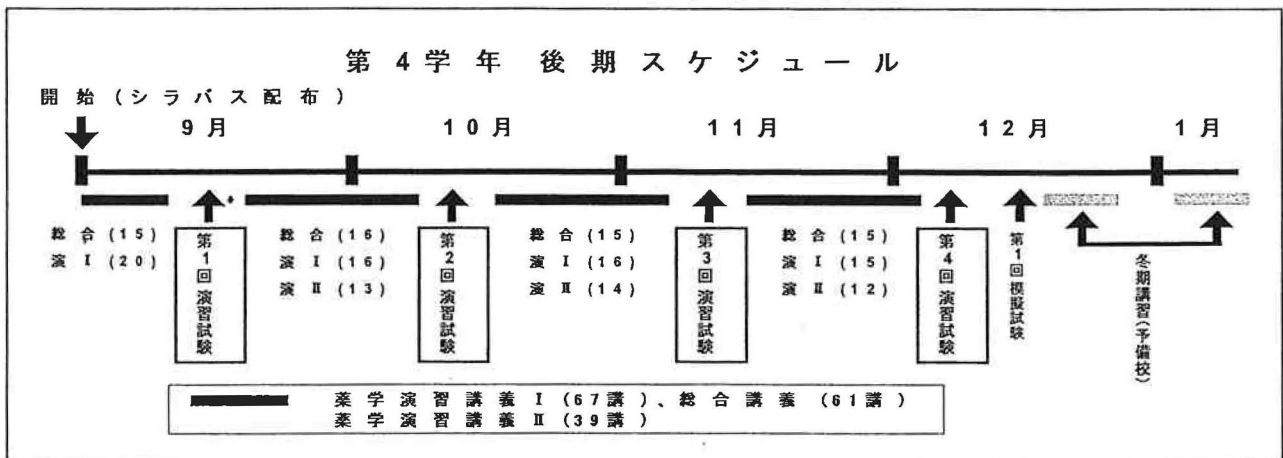
各期の最後に試験（薬学演習試験、全4回、各回360問）を実施し、知識の習熟度を確認する（全4回の演習試験と卒業試験を併せると学生は計1740問の問題を解くことになる。なお、国家試験は240問）。また、各試験終了後には、学生が効率よく不得意科目や分野を克服できるように試験問題の解説を通して指導する（薬学演習講義Ⅱを解説に充てる）。なお、詳細は省略するが、卒業試験の合否判定は卒業試験の成績と4回の演習試験の成績を併せて行う。



基礎薬学分野（有機化学、物理化学、生化学など）の科目はそのほとんどが低学年のときに開講されているため、できるだけ早い時期に知識の確認、復習が必要となる。そのため4年前期に基礎学力の充実を目的に、2回の基礎薬学試験（5月と6月、各回60問）を実施し、第1回目の試験において成績不振の者に対しては基礎薬学養成講座を開講している。

3) その他：国家試験予備校等により主催される全国統一模擬試験を、第4回演習試験直後（12月）及び第2回卒業試験直後（2月）に本学において実施している。また、予備校による講習会（夏休み、冬休み及び国試直前の3回）も本学において開催されている（希望者のみ、自費）。

最後に、教員は講義や試験を実施するだけでなく、ゼミ学生（担当講座に所属する学生）の成績を常に把握し、勉強法等についての指導を行っている。今後は学生の学力水準、勉強スタイル、生活スタイル等がさらに多様化していくものと推察されるため、より柔軟かつ可能な限り個別化した支援（指導）体制の確立が国試対策を進める上で重要と考えられる。



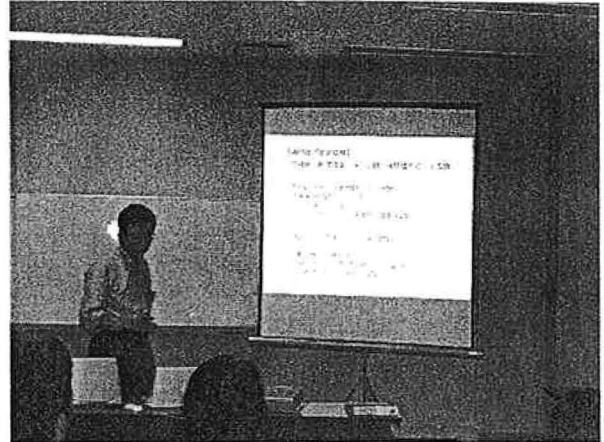
<歯学部为国家試験対策について>

歯学部 教授 東城 庸介

昨年のFD合宿で私が「歯学部为国家試験対策」についてお話ししましたので、その概略をご報告します。

現在の歯科医師国家試験は365問から成り、その内訳は、必修問題50問、一般問題210問、臨床実地問題105問です。基本的には5肢選択問題です。合格ラインは、必修で80%、一般と実地問題で60%と言われていましたが、一昨年からはより高いレベルに合格ラインが設定されているようです。歯科医師を目指す学生にとっては大変厳しい時代です。本学歯学部の合格率は前回82.5%（全国平均74.6%）で、これは全国の歯科大・歯学部29校中11位、私立歯科大17校中4位でした。私立大学の中では例年上位に位置していますが、これは国家試験対策がそれなりに効果を上げている現れと考えています。

歯学部では10月末から3回の卒業試験を実施していますが、これを厳格に実施することが最大の国家試験対策だと思います。問題数、問題様式、合否判定は基本的に国家試験に準じて行われ、血も涙もないようですが、1点でも合格ラインに満たないと卒業できません。問題作成には講師以上のほとんど全ての教員が参加し、作られた問題は事前にチェックを受け、さらに事後に開かれる検討会では問題が1問1問吟味されますので、各教員は自ずと卒業試験に真剣に取り組むようになります。試験の度に365問の問題を新規に作成することは大変な作業ですが、厳格な卒業試験の実施があって初めて高い国試合格率が保証されると考えます。卒業試験を通じて学生は真剣に国試勉強に取り組む姿勢を持つようになります。



歯学部では本年度から共用試験（CBT, OSCE）が本格的に始まりました。この試験は登院実習の資格判定的な性格を有し、本学では4学年の終わりに実施されます。この試験結果の良否は国試の結果にも繋がりますので、歯学部では各学年のカリキュラムにCBT対策授業を組み込み、4月にMCT（Multiple Choice Test）と名付けたCBTに準じた筆記試験を行います。正解率が80%に満たない学生については補講と再試験を課しています。卒業試験と同様、問題作成にはほとんどの教員が関わります。

6学年では様々な国試対策授業が実施されています。前期には臨床基礎学Ⅱと臨床実地講義がありますが、それぞれ基礎と臨床の復習授業です。後期には総合特別講義という基礎・臨床の全講座による卒試・国試対策授業、さらにローテーション講義という臨床系教員が主に担当するグループ授業があります。この他に学生による自主的な勉強会や模擬試験が実施され、学生は十分に力を付けて卒試、国試に臨みます。

繰り返しになりますが、歯学部では全ての教員が国試対策に真剣に取り組む体制を長年かけて作り上げてきました。国試対策を一部の教員に押しつけ、他の教員は無関心という状況は最悪だと思います。

国試の勉強は学生個人の責任であり、大学が手取り足取り指導する必要はないとか、国試対策ばかりに偏重すると教育内容が貧弱化すると考える向きもあるかも知れません。しかし、本学に入学する学生の多くは何らかの国家資格を取得することを目的に入学したのであり、彼らの夢をかなえることが本学の第一の使命です。高い国試合格率を維持して初めて豊かで質の高い教育内容を肉付けすることが可能になるのではないのでしょうか。

編集後記

これまで、FD委員会では、学生による授業アンケート、新任教員研修、合宿研修などを柱として活動してきました。平成18年度は、学生による授業アンケート結果の公開を行うことが本委員会の重要な取り組みと考えています。また、この授業アンケート結果の公開については、本学の「新5か年行動計画」にも明記されています。この公開が円滑になされるよう教員各位のご協力をお願いいたします。

発行日 2006年3月27日

発行元 北海道医療大学FD委員会

編集委員 阿部和厚、有末 眞、沢辺千恵子、志渡晃一、○関崎春雄、館山光子、東城庸介、土肥聡明、中野 茂、長田真美、○樋口孝城、溝口 到、森田 勲、○和田啓爾、○飛岡範至（○発行担当）